

冬の女

横光利一

青空文庫

女が一人籬を越してぼんやりと隣家の庭を眺めてゐる。庭には数輪の寒菊が地の上を這ひながら乱れてゐた。掃き寄せられた朽葉の下からは煙が空に昇つてゐる。

「何を考へていらつしやるんです。」と彼女に一言訊ねてみるが
良い。

彼女は袖口を胸に重ねて、

「秋の歌。」

もし彼女がそのやうに答へたなら止めねばならぬ。静に彼女の
手を曳いて、

「あなたは春の来るのを考へねばなりません。家へ歸つてお茶で

もお煎れになつてはどうですか。春の着物の御用意はいかゞです。湯のしん／＼と沸き立つた銅壺の傍で縫物をして下さい。あなたの良人は間もなく手先を赤くして歸つて来るでせう。それまであなたは過ぎ去つた秋の物思ひに耽つてはいけません。秋には幸福がありません。さア家の中へ這入らうではありませんか。もし炭箱へ手を入れることがお嫌ひなら手袋を借しませう。水は冷めたくとも間もなく歸る良人の手先を考へておやりなさい。花々はまだ花屋の窓の中で凋んではをりません。暖炉の上の花瓶から埃りをとつて先づ一輪の水仙を差し給へ。縁の上では暖く日光が猫を眠らせ、小犬は明るい自分の影に戯れてゐる筈です。だが、あなたはあの山茶花を見てはなりません。あの花はあれは淋しい。物

置の影で黙然と咲きながら散つて行きます。あなたは快活に白い息をお吐きなさい。あの散り行く花卉に驚いて飛び立つ鳥のやうに。眼をくるくむいて白い大根だいこんをかゝへて勝手元でお笑ひなさい。良人の持つて歸つた包からはあなたの新らしいシヨールが飛び出るでせう。しかし、春は間もなく来るのです。手水鉢の柄杓の周囲で蜜蜂の羽音が聞えます。村から街へ登る車の数が日増しに増して参ります。百舌は遠い国へ歸つて行き、枯枝からは芽が生々と噴き出します。あなたは、愛人の手をとつて郊外を漫步する二人の若い人達を見るでせう。そのときあなたは良人の手をとつて、『まア、春が来ましたわ。ね、ね。』と云ひ給へ。だが、あなたの良人のスプリングコートは黴の匂ひがしてゐてはいけま

せん。
「

青空文庫情報

底本：「定本横光利一全集 第二卷」河出書房新社

1981（昭和56）年8月31日初版発行

底本の親本：「改造」

1924（大正13）年12月1日発行、第6巻第12号

初出：「改造」

1924（大正13）年12月1日発行、第6巻第12号

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、旧字、旧仮名の底本の表記を、新字旧仮名にあらためました。

※くの字点と踊り字「ゞ」は、底本のママとしました。

入力：高寺康仁

校正：松永正敏

2001年12月11日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

冬の女

横光利一

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>